

方向

第一五六号

一九九三年五月三〇日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

漁師の唄 (詞という詩 二)

1993 05 12

原田憲雄

漁師の唄

〔唐〕張志和

漁父

西塞山のあたりには白い鷺とび

西塞山前白鷺飛。

桃の花ちる河水にウグイは肥えた

桃花流水鱖魚肥。

青い笠

青箬笠

緑の蓑

緑蓑衣。

ななめ吹く風そぞろ降る雨 いやさ帰るまい

斜風細雨不須歸。

作者の張志和は隱者として知られた人です。『新唐書』卷一九六の伝によると、字は子同。婺州金華（浙江省金華）の人で、始めの名は龜齡。十六歳で文官試験の明經科に合格し、肅宗皇帝に認められ、左金吾衛録事参軍となり、志和の名を賜ったが、ある事件に連座し南浦尉におとされ、赦されて帰還したとき親が亡くなったあとだったので、そのまま役人をやめ、煙波釣徒と自称し隱者生活に入ったということです。

「漁師の唄」は、五首の連作で、これによってかれの名は喧伝され、書道の大家として知られる顔真卿と交わり、のちに憲宗皇帝が会いたく思い、人相書きをまわして捜させたが見つからなかった、といった伝説があるほどです。連作の第二首、

釣り場の漁師はハッピをはおり

三々五々と小舟こぎだす

棹さばき

波に乗り

長江の騒ぐ白浪 なあにこわくない

第三首、

雪溪湾で魚釣る爺さん

小舟が家で西へ東へ

江には雪

浦べは風

蓮の葉かぶれば ふふんつらかねえ

第四首、

松江の蟹の亭主は喜んで

釣臺漁父褐為裘

兩兩三三舴艋舟

能縱櫂

慣乘流

長江白浪不曾憂

雪溪湾浦釣魚翁

舴艋為家西復東

江上雪

浦辺風

笑著荷衣不歎窮

松江蟹舍主人歛

まこも飯じゅんさい汁を馳走する

楓ちり

菰飯蓴羹亦共餐

楓葉落

荻かれ

荻花乾

酔うて宿るいさり舟 寒さおぼえず

酔宿漁舟不覺寒

第五首、

青草湖せいそうこなんとまんなるなお月さん

青草湖中月正圓

巴陵はりようの漁師の舟歌しきり

巴陵漁父櫂歌連

釣り糸車

釣車子

はしけ舟

櫂頭船

楽しみは波のうえ 天国に用はない

楽在風波不用仙

いずれもおもしろいが、第一首がなんといってもいちばんすばらしく、また愛唱されています。西塞山という山は、浙江省湖州にも、湖南省岳陽にもあり、ここのがそのどちらであるかについて説が分かれます。第三首の雲溪、第四首の松江が湖州に近く、第五首の青草湖と巴陵が岳陽に近いので、作者がそのどちらの土地とも関わりをもったらしく感ぜられるからです。どちらと極めつけないほうがよいのかもしれませんが、鰾魚けつぎょをウグイと訳したのは辞書のひとつにそうあったからで、正しければ、体長三〇センチほどの、おいしい魚だそうです。鰾は、

竹冠に若とする本もあり、どちらも同じく音は「じゃく」意味は「竹の皮」です。舴艋は小舟。蟹舎は漁人の家。楓は、カエデと読んでいるが、日本のカエデとは違うので、フウというべきだとの議論もあります。詩にうたわれたものについては、かならずしも科学的厳密をもとめる必要はなさそうです。釣車子は釣竿につけるリールです。今のものほど精巧ではないが原理としては同じものが、中国では唐代にすでに使われていたのです。楸頭船はハシケ。肅宗李亨（七一―七六二）は唐の第七代の、憲宗李純（七七―八二〇）は第十一代の皇帝です。さきの伝のいう通りとすれば、張志和は八世紀の中頃から九世紀の初めにかけての人です。

この作品の原詞牌が何だったかはよく分からず、わたしの記した「漁父」は『全唐詩』に従ったのです。『詞譜』や『詞律』では「漁歌子」としています。もっともその「漁歌子」には張志和の作のような単調ではない双調のものもあり、これは唐宋・五代のころから作られはじめたようです。それはとにかく、張志和の作は人々に愛唱されただけでなく、替え歌もずいぶん作られました。替え歌は、同じ形式のものもあれば、違ったものもあり、詞牌の名も同じものもあれば違ったものもあるのですが、その幾つかを紹介しておきましょう。

漁師の唄
〔五代〕李煜

漁父

権いっばいの春風にいっそうの舟

一櫂春風一葉舟

釣り糸ひとすじ針ひとつ

一綸繭縷一輕鉤

渚に花

杯に酒

万里の波のうちこそ 自由があるのだ

花満渚

酒滿甌

萬頃波中得自由

唐が滅びた九〇七年から趙匡胤（九二七―九七六）が宋の国を建てる九六〇年までの半世紀に、中国の黄河中流域に後梁（九〇七―九二三）、後唐（九二三―九三六）、後晋（九三六―九四六）、後漢（九四七―九五〇）、後周（九五―九五九）の五朝が、そして大江の沿岸から南部にかけて呉（九〇二―九三七）、南唐（九三七―九七五）前蜀（九〇七―九二五）、後蜀（九三〇―九六五）、南漢（九一七―九七二）、楚（九〇七―九五一）、呉越（九〇七―九七八）、閩（九〇九―九四五）、荆南（九〇七―九六三）、北漢（九五―九七九）の十国が興亡し、この時代を「五代」といいます。李煜（九三七―九七八）は南唐の第三代で、宋に降伏し、最後の君主だったことから、「後主」と呼ばれます。亡国の君主ではありませんが、この時代最高の文化人で、詞の作者としてももっともすぐれた一人です。この作はその生涯とあわせて味わうといっそうあわれですが、かれについては後に改めて語らねばなりません。

李煜から一世紀のち、東坡居士の号で知られる宋の蘇軾（一〇三六―一一〇一）にも「漁父」四首があります。

漁師の唄

〔末〕蘇軾

漁父

漁師が飲もうと

どこへゆく

さかな蟹どつとぶちまけ

酒をおくれな うむ酔えるほど

勘定なんざいいじゃあねえか

第二首、

漁師は酔うて

蓑着ておどる

酔うても帰りの潮どき知って

棹にまかせて 小舟ふうらふうら

醒めたら何処どこについてるか

第三首、

漁師が醒める

まひるの川で

夢きれ花ちり柳のわた飛び

酒さめまた酔い 酔うてはさめ

漁父飲

誰家去

魚蟹一時分付

酒無多少酔為期

彼此不論銭数

漁父酔

蓑衣舞

酔裏却尋帰路

軽舟短棹任横斜

醒後不知何処

漁父醒

春江午

夢断落花飛絮

酒醒還酔酔還醒

ふふ今がむかしか昔がいまか

一笑人間今古

第四首、

漁師がわらう

漁父笑

鷗がひらり

輕鷗拳

もうもうと河いちめんの風と雨

漠漠一江風雨

河辺を馬でうろうろと そのお役人

江辺騎馬是官人

まあおれの小舟で南へ渡すべか

借我孤舟南渡

この四首は一〇八五年、五十歳で作ったもの。かれは四十四歳、朝政誹謗の科で逮捕投獄され、次のとし湖北の黄州に流されましたが、この年、政治状況が変わって中央に呼びもとされるのです。「河辺で騎馬のお役人」とは東坡自身をさし、そのとんまさを漁師に嘲らせているのは、すでに朗報を聞いた心のはずみからでしょうか。詞牌は同じ「漁父」ですが、志和のものとは形式が違います。東坡にはもう一首、漁父をうたった、しかし詞牌は「浣溪沙」とする双調の作品があり、序文に、

玄真子の漁父詞は極めて清麗なれども、恨むらくはその曲度きょくどつたわらず。故に數語を加え、浣溪沙をもってこれを歌わしむ。

と書いています。「玄真子」は張志和の別号、「曲度」は歌唱法。察するに、志和の「漁父」は、東坡のころに

はすでに歌い方も分からなくなっていたのです。さてその「浣溪沙」。

西塞山のあたりには白い鷺とび

散花の洲のむこう片帆ほのぼの

桃の花ちる河水にウグイは肥えた

西塞山辺白鷺飛

散花洲外片帆微

桃花流水鰕魚肥

身には青笠かぶっているし

どこへ行くにも緑の蓑

ななめ吹く風そぞろ降る雨 いやさ帰るまい

自庇一身青笠笠

相隨到處綠蓑衣

斜風細雨不須歸

これだけだったら、かなりのものといえましようが、張志和の作品とならべると、お喋りが目立ちます。そこで後輩の山谷・黄庭堅（一〇四五—一一〇五）がまた作ってみせるのですが、きりがないので割愛します。

※前号 一九ページの、四行から一五行にかけて、原紙の皺のため読み難いところがありましたので左に。

四行 国でうたわれ 五行 いた可能性 六行 菩薩蠻は、双調で 七行 仄字で韻を 八行

第二句末の 九行 伝統的に 一〇行 これに対し 一一行 仄字ばかり 一二行 メロディー

一三行 かりに 一四行 なるわけです。 一五行 「玉梯」を「玉階」

今夕歳華落
 令人惜平生
 心事如波濤
 中坐時時驚馬
 朔客騎白馬
 劍犯懸蘭絡
 俊健如生孫
 肯拾途中蛩

山本のぶを刻（一九九一・一）

李賀 申胡胡子感角西木歌 ヒチリキの歌（続）

前回は、この歌のまえ半分で、山本氏は一九九〇年の年賀状のために刻んだ。あと半分は、一九九一年のために刻んだ。それがこれである。

この夕べ 華こぼるるに／あはあはと 過ぎしいのちの／うちよする ころ潮騒／かへりみて 時におどろく／北のさきもり 白き馬はせ／蘭のひも 劍にかけぬ／ましらなす たけるを君よ／燄の火もて ふみを照らすや

李賀の生まれたのは七九〇年か七九一年である。一九九〇年または一九九一年は、その生誕一二〇〇年にあたる。寡黙な山本氏は、なにもいわずに、朴の木を刻み、上質の和紙に、かれの「齊栗の歌」を刷った。（1993.05.18 原田憲雄）

06-10. さて、世尊は、さらに比丘衆一切に呼びかけられた——

比丘たちよ、わたしはあなたがたに告げて、知らせよう。このわたしの弟子の大徳マハーカーティヤーナは、八千万億の仏たちのもとで、恭敬し、師事し、尊敬し、供養し、崇拝するだろう。そして涅槃に入られたときそれらの如来のために、塔を建てるだろう。それは高さ千ヨージュアナ、周囲五十ヨージュアナで、金・銀・瑠璃・玻璃・赤真珠・碼碯、そして第七は琥珀という、七宝造りである。その塔に、花・薫香・香水・花冠・塗香・抹香・上衣・日傘・幢・幡・旗で供養するだろう。それからはるか後に、かれはさらに二千万億の仏のもとで同じように恭敬し、師事し、尊敬し、供養し、崇拝するだろう。かれは最後の化身で身体を得るとき、「閻浮那提金光」と名づける如来・尊敬されるべき・正しく覚ったひと、としてこの世に現われ、知と行を完成し、スガタであり、世間を知り、無上のひとであり、訓練されるべき人々の調御者であり、天神と人間との教師であり、仏であり、世尊であるだろう。またその仏国土は、たいへん清浄で、平らで、魅力的で、端正で、見晴らしがよく、玻璃の地は宝樹で莊嚴され、金糸で区画され、花がまき散らされ、地獄・畜生・餓鬼・阿修羅の群れから離れ、多くの人間や天神で満ちていて、幾百千もの多くの声聞と、幾百千もの多くの菩薩が、そこを莊嚴し、寿命は十二中劫、正法は二十中劫のあいだ持続し、像法もまた二十中劫のあいだ持続するだろう。

atha khalu bhagavān punar eva sarvāvantam dhikṣu-saṃśham āmantrayate sma / ārocayāmi vo dhikṣ-
 avah prativedayāmi / ayam mama śrāvakeḥ sthavitro mahākālyāyano 'śtānām buddha-kotī-śata-sahasr-
 āṇām antike sat-kāraṃ kariṣyati guru-kāraṃ mānanām pūjanām arcanaṃ apacāyanām kariṣyati / par-
 inirvṛtānām ca teṣāṃ tathāgatānām stūpān kariṣyati yojana-sahasraṃ samucchrayeṇa pañcāśad-yoj-
 anāni pariṇāhena saptaṇām ratnānām / tad-yathā suverṇasya rūpyasya vaidūryasya sphaṭikasya lo-
 hitamukuter aśmagarbhasya musāragalvasya saptaṃsya ratnasya / teṣāṃ ca stūpānām pūjām kariṣy-
 ati puṣpa-dhūpa-ḡandha-mālyā-vilpāna-cūrṇa-civara-cchatra-dhvaja-patākā-vijayantīdhis (W: vajj-
 ayantīdhis) ca / tataś ca dhūyah pareṇa paratāreṇa punar vimśatīnām buddha-koṭīnām antika eva-
 m-rūpam eva sat-kāraṃ kariṣyati guru-kāraṃ mānanām pūjanām arcanaṃ apacāyanām kariṣyati / sa
 paścime samucchraye paścima ātmabhāva-pratilambhe jāmbūnadeprabhāso nama tathāgato 'han samyak
 -sambuddho loke bhaviṣyati vidyā-carāṇa-saṃpannah sugato loka-vid annuteraḥ puruṣa-damya-sāra-
 thih śāstā devānām ca manusyaṇām ca buddho bhagavān / pariśuddham cāsya buddha-kṣetraṃ bhaviṣ-
 yati samam ramaṇīyam prāsādikaṃ darśanīyam sphaṭika-mayam ratna-vṛkṣābhivicitritam suvargā-sū-
 tr 'ācchoditam puṣpa-saṃstara-saṃstṛtam apagata-niraya-tiryag-yoni-yama-lokasura-kāyam bahu-na-
 ra-deva-pratipūṇam bahu-śrāvaka-śata-sahasropasobhitam bahu-bodhisattva-śata-sahasralamkṛtam/
 dvādaśa cāsyāntera-kalpān āyus-pramāṇam bhaviṣyati / vimśatim cāsyāntara-kalpān saddharmaḥ sth-

塔の周囲の「五十ヨージャナ」は原文のとおりだが、他のところで言い、妙本が訳するように「五百ヨージャナ」とするほうがよいのであろう。七宝についてはすでに「巡礼三〇—三三」でくわしく分析した。

「閻浮那提金光（えんぶなだいこんこう）」とは、閻浮、すなわちジャンプー、那提、すなわち河で、「ジャンプー樹の大森林を流れる河の底の砂金のように紫金の光に輝く」というほどの意。古代インドでは、スメール（須弥）山を中心にして東西南北に四洲があり、人間が住むとされ、南の洲がジャンプー・ドゥヴィーパで、インドなどがそこに属する。中央の森林に多く茂るのがジャンプー樹、学名は *Engenia jambos* 葡萄の一種で、五月ごろ花が咲き、深紫の果実を結ぶという。ジャンプーの森を流れるのがジャンプー河で、この河でとれる砂金もとても良質で紫色を帯びるので閻浮檀金（えんぶだこん）といって尊重された。

06-11. さて、世尊は、そのとき、次の偈を説かれた。

atha khalu bhagavāns tasyāṃ velayāṃ imaḥ gāthā abhāsata ||

06-12. 聞きなさい、比丘たちよ、あなたがたはみな、いまわたしが話す、たがうことなき言葉を。

カーティヤーヤナ大徳、このわたしの弟子は、導師たちに供養をおこなうだろう。（二二五）

かれは、それら世間の導師たちに対し、種々さまざまに恭敬をなし、

涅槃に入られたのち、塔を建立して、花や香を供えるだろう。（二二六）

かれは最後の化身をえて、たいへん清浄な国土で、ジナとなるだろう。

この知を円満に成就し、幾千万億の衆生に説き示すだろう。(二七)

かれは天神ともなる世間で恭敬せられ、燦爛と輝き、全能の仏、

閻浮那提金光という名で、幾千万の天神や人間の救済者となるだろう。(二八)

多くの菩薩たち、声聞たちが、はかりきれず数えきれないほど、この国土にいて、

仏の教えを莊嚴するだろう、かれらは一切、有の執着から離れていて。(二九)

śrnotha me dhikṣava adya sarva udāharantasya girām ananyathām /

kātyāyanah sthaviṛu ayam mi śrāvakaḥ kariṣyate pūja vināyakānām //25//

satkāru teṣāṃ ca bahu-prakārm bahu (W:bahū) -vidham loka-vināyakānām /

stūpāmś ca kārāpāyi nirvṛtānām pūṣeṇi gandhehi ca pūjayiṣyati //26//

labhitva so paścimakam samuccharaṣyāṃ pariśuddha-kṣetrasmī jino bhaviṣyati /

paripūrayitvā imam eva jñānaṃ deśeṣyate prāṇi-sahasra-koṭinām //27//

sa satkrto loki sadevakasmin prabhī-karo buddhavibhur bhaviṣyati /

jāmbūnadābhāsusa cāpi nāmnē saṃtārako deva-manuṣya-koṭinām //28//

bahu-bodhisattvās tatha śrāvakaś ca amitā asaṃkhyāpi ca tatra kṣetre /

upaśobhayiṣyanti te (W:ti) buddha-śāsanaṃ bhava-prahīṇā vibhāvāś ca sarve //29//

あふれるほどの若葉だ

池の底から陽炎のように

水中をゆっくりとのぼって来る

ヒシの芽が

もうすぐ外に顔を出し

池の表を

濃いみどりで占領するだろう

クモの巣が風にあおられて

ふくれたりひっこんだり

夕べのうちにクモは

十九本もの縦糸をかけ

こまかい梯子を張りめぐらしたが

昼間は巣をからにして

どこへひっこんでいるのだろう

アメンボは下をくぐってすいすい泳ぎ

小さい虫も飛んでこないから

クモの巣は

まっさらのまま

遠くの小学校でチャイムが鳴っている

「さあお昼の給食です

当番さん急いでください」

エプロンをして三角巾をかぶった子どもたちが

シチュウやパンを運んでくる

「ああパン皿の山を倒さないように」

何でもおもしろがってしなければ

楽しいことなんかないのだから

たいくつな金魚はときどき

果てしない追いかけっこをする

横腹を金色に光らせて浅瀬を渡り

ヒシの茎をゆらしてそのまま
沈黙する

イチハツの花

白いわたぼうし

アマリリスは飢餓の夢からまだ醒めない

他の国では飢えている人がいっぱいいるのに

グルメだなんて世界の食資源を食い荒すわた

したち日本人はいずれバチがあたるでしょう

そんなこと今になるまで言えなかったのだろうか

ヤエムグラとドクダミのやぶの中に

角のようなアマリリスの芽が出ていた

今日から愛鳥週間です

キュリッキュリッキュリッ

ヒヨドリが呼んでいる

鳥語は万国共通だとだれかが新聞に書いたけど

ヨーロッパで見たものより日本のスズメは太っていますと

旅がえりの人は言う

わたしは鳥語を知らない

ヨーロッパのスズメを見たこともない

金魚が一行に並んでひらひらと

泳いでいった

北山杉の里

1993 05 20

原田 慶

五月の連休の一日、町内のレクリエーションの下見ということで、北区大森町というところへ行った。

国道一六二号線が、高雄、横尾、梅尾を過ぎ、清滝川にそって中川、杉坂、北山、小野郷を通過して周山の方へ行っている。小野郷のあたりで国道と分かれてまっすぐ北へ入って行くと大森町であった。わたし達の町からマイクロバスに乗せてもらって四十分余りだろうか。五月に入ったばかりの山里は空気が澄んで肌寒く、前日の雨で草木もしっとりとした水を含んで冷たい日だった。山の間をいちばん低いところを縦に切って谷川の水をいくすじ

も集めながら川が流れている。まだ川巾は広くないが、清滝川の上流である。その兩岸、山に近いほうの斜面に家が散在し、反対側はすこし平地が広がって、田畑になっている。見える家の数は少なく、茅葺屋根をトタンで覆ってある家や、瓦屋根の家もあり、ちょうど茅を葺きかえている家もあった。

まだ春の農作業は始まらないらしくて、田畑は一面に草が生え、広い斜面の畑で草をとっているひとが一人だけ見えた。山裾の高みにある家の石垣に紫色の芝桜がふさのように下がって咲いているのが美しい。その近くにある寺院は無住で、町の人の手によるのかきれいに掃除されている。こんな静かな山深いところをどうして町と呼ぶのだろうか、時々そんなことを考えさせられる所に出会うことがある。村という呼び名をはぎ取られて、仕方なくだんだん町の顔に変わってきたようなところである。

まわりの山々にはきちんと並べたように北山杉がよく手入れされ、長い足を出して、上のほうに円錐形の緑の衣を着ている。床柱などの磨き丸太にされる北山杉は、真円、円筒形上下の両端の直径差が五ミリ以内でなければならぬために、枝打ちを繰り返すので、このような姿をしているのだそうである。

この里に、休憩と昼食・夕食をさせてくる家があり、オオモリ・サンパレーと名づけている。そこからの迎える車で、わたし達は来たのだった。その家に入ると囲炉裏には真赤な燂がいっぱい、茶釜のお湯が沸いていた。ひとまずここに上がり、火に寄ってほっとする。囲炉裏の板戸を背にした壁ぎわを猫座とって、いちばん暖かいのだと一緒に行った人が教えてくれた。猫はいつもその場所に居るそうである。しばらく休憩してお茶をいただき、外の様子を見にでかけた。家の横に山から流れてくる谷川があり、その水を受けて水車が掛けてあるが、

水勢が弱いのか、時々、思い出したようにゴトゴトまわり、またじき止まってしまふ。その力を何かに使うようでもなかった。谷川に沿って坂を下って行くと、谷川が清滝川へ注ぐところに橋があった。上に立って上流を見ると、その辺りだけ石垣の護岸工事がしてあって、水は低い堰を何段も下りながら流れている。川岸にも北山杉の林が見えた。

橋を渡ると、トタン屋根の広い場所に、パーベキューができる設備がしてあり、窪地を隔てて広いグラウンドになっているが、草が一面に生えていて、最近に使われたことはないようだった。たぶん、田んぼだった所を埋めてグラウンドにしたのだと思うが、ここは、オオモリ・サンバレーに来た人達が、ゲームをしたり、乗馬にも使うのだそうである。今は見渡すかぎり人影はなく、その向こうは北山杉の山に囲まれて、山裾は新芽の若緑が鮮やかである。振り返ると、いま出てきた家と、ほかに十軒ほどの家が木々のなかに見えかくれして、上はすぐに杉の山である。伐採された後にはもう苗木が育っているが、それが材木になるのは、植えた人の子や孫の代になるのだろう。

新聞によると、最近地球の温暖化で雪質が変わり、雪に水分が多いので、木の上に積もった雪の重みに耐えかねて北山杉が曲がったり折れたりするという。今年被害木が約二十七万九千本で、二年前の六十七万本に次ぐ被害だそうである。山で働く人の悲しさが想像できる。府では、生産者、加工業者に資金の低利融資やヘリコプターの風圧を利用した除雪への助成を行なうということであるが、三十年、四十年の成木に被害が多いと聞くから、その年月、杉の木とともに生きてきた人の心を思うとほんとうにつらい気がする。

サンパレーを開いている農家も、もとは山仕事や田畑を作って暮らしていたのである。このあたりではめずらしくがっしりした瓦屋根だけれど、家の中の造りから見ると、昔は茅葺きだったのかもしれない。すこし崩れかけてはいるが、大きな土蔵もあり、庭先の植込みも美しい。若い人達はみんな京都の市中へ出てゆき、中年の夫婦でここを経営している。近所の女のひと達が手伝っているらしかった。よもぎを摘んでよもぎ餅をつき、さんしょを摘んでちりめんさんしょを炊く、わらびやぜんまいを採って山菜料理をつくる。他には畑でとれた野菜で鍋料理やすき焼きをして、もてなしているのである。ゲートボールのコートを三面、グラウンド一面、バーベキューの設備やログハウスも建てて、なかで囲碁やマージャンなどができるのだという。老人クラブや、婦人会、町内会、句会、詩吟、謡の会などに座敷を貸して食事を出している。年に一回は、身体障害者の人達を招待して、一日ゆっくり遊んでもらっているとも言っていた。わたし達が行った日には、老人クラブが二組と他に夫婦で来ている人や、家族で来ている人などで、座敷はいっぱいだった。八十何歳だとかいうお婆さんが何人かあって、元気にゲートボールをしていたが、「ポケンようにこんなことしてますんや」などと言ってけろっとしているのを見ると「なんにもなくても元気でいなくっちゃあ」という童話のなかに出てくる小猫のことばを思い出した。

ゲートボールのコートは、川の上流の山のなかにあり、そこへの橋を渡るとき、立て札に清滝川起点と書いてあった。コートは二面つづいていて、軽井沢のテニスコートでも想像させるような明るい場所で、林ではウグイスが鳴き、谷川にそった山道にはイタドリが小さな仏塔のように並んでいる。ムラサキケマンやスマイレの花がたくさん咲いていた。子どもの頃に食べたのを思い出してイタドリを一本、採って帰って塩水に浮かべて食べてみ

だが、思っていたよりずっと野の草らしい香りが強かった。

昼食をすませてから、三時半頃に帰りのバスが出るというので、それまでに山の上の滝を見に行くことにした。ゲートボール場の方へ曲がらずに、まっすぐ山道を上って行くと、途中にキャンプ場があり、自動車で来た若い人達が音楽を流したりしている。そこを過ぎて上って行くと、針金のロープを使って、北山杉を山上から吊りおろしている作業場があった。そのなかを通らなければならぬので、木が地上に着くの待って、「お邪魔します」と声をかけて通ったが、働いている人の傍をのん気に歩いているのは何となく気がひける。三人が作業していたが、わたし達をじろっと見て黙っていた。

右下のほうに清滝川の源流が灌木を分けて、躍るように流れくだっているのを見おろす。作業用の長い板の橋が山から山へ細長く渡してある。山吹の黄色がかたまっただちこちに見える。その辺りから左の山のなかに入って、谷川にそって杉の中をどどん登っていった。谷川は急になったり、棚のようなところにさしかかってゆっくりし、突然とびおりたりして流れている。笹や山吹におおわれて隠れるかと思うと、石を乗り越え、岩のすき間をぬい、意思のあるもののように走って行く。枝を払われて下に積もった杉の葉が、昨日の雨を含んでふわふわする。曲がりながらなるべくゆるやかに登るようにつけられた山道をだいたい行つたところで大きな岩に突きあたった。そこからはもう進めない。霧ヶ谷という滝である。二十メートルくらいの高さだろうか、下のほうは霧のようになって水が落ちていて、前にしめ縄が張ってあった。切り立った岩は一面に苔が生えてうす暗く、ひいやりとしている。一緒に行つた男の人が、思わず拍手を打って拝んだのを見て、わたしも前にたって拝礼した。

滝というのは不思議に清らかな感じがするものである。

後で、滝へ行かなかった人にその山のなかや川の美しさを話したら、

「奥さんはこんなことを知らはらへんさかい、水が美しいと感動してはるけど、わたしらそんなん……」

とおかしそうな顔をした。「わたしは田舎育ちやさかい、こんな美しいところになおさら感動するんやけどなあ」と思いながら、話を聞いてみると、その人も北山杉の、ここよりもっと奥のほうの小さな里で、そのお寺の生まれなのだそうである。小さな集落の寺では生活してゆけないので、寺を閉めて、家族で伏見の方に出て、お父さんはサラリーマンになり、法事や葬儀の時にだけ寺へ帰っておられたのだという。そんな時には里の人が寺を開けて掃除をし、お坊さんが帰ってくるのを待っていたのだそうである。お父さんが亡くなってからは、お母さんが代りをされ、今は葬儀などには、大阪にいる兄さんが自動車で行かれるのだという。そう言えばこの山手のほうにあったお寺も閉まっていた。同じようなことなのかもしれない。

こんな山のなかにある静かな集落が、村というよりはいくらか都会的な硬さを感じさせるのは、そのように人の暮しが昔とは違ってきているからなのだろう。足もとには美しい自然がいっぱいなのに、村ののどかさが感じられない。道を行くのは自動車だけ、ちらほら歩いているのは他から遊びに来た人、地もとの人は黙って山かげで働いているのだろうけれど、ひっそりとして姿は見えない。

この静かな山里にあまりずうずうしく入り込んではいけないという気がしきりにした。でも若い人が便利な土地へ出ていってしまうのなら、残った人々が元気であるために、他の土地から訪れる人もあった方がよいのかも

しれない。自然を壊さないように、住む人々の暮しを乱さないように、お祭りに招かれた客というほどの礼儀正しきで、このような山里を訪問するのがよい。今日、サンバレーの客となっていた人達はみんなほんとうに静かな人だった。大きな自然が人を静かにさせるのかもしれない。

四時近くになってから、夕食までいる老人クラブの人達だけのこして、わたし達はマイクロバスで帰途についた。杉坂から鳴滝のあたりまでは自動車が混んであまり進まなかったの、わたし達の町に着くと五時を過ぎていた。夢から醒めたような気分ですバスを降りたが、近所の家によって、おみやげにもらったよもぎ餅をすこし分けて、その人としやべったらやっと我に返った。七月に町内のレクリエーションに行く頃には、季節がどんなに変わっているだろうか。

北の対立国

(中国の詩人と仏教 三二)

1993 05 10 原田憲雄

蕭衍が皇帝となって梁の国を建てたとき、北緯三三―四度あたりを境にしてその北に、魏という国が対峙していました。この国を『三国志』の魏と区別して「北魏」ともいいます。

魏は、陰山山脈の北部にいた鮮卑族の拓拔珪（たくばつ・けい 三七二―四〇九）が、三八六年、内蒙古の盛楽を都として開いた国で、珪を道武帝とよびます。三九八年、都を平城（山西省大同）に移し、仏教を公認し、

首都に仏寺・仏像を建立したので、仏教が盛んになりました。第三代の太武帝が、仏教嫌いの儒教徒崔浩（さいこう）を宰相とし、かれと道士寇謙之（こうけんし）の策を容れて徹底的な廃仏を行ないましたが、帝の死後、仏教はふたたび盛んになります。六代、孝文帝の拓拔宏（四六七―四九九）は、漢民族の文化にあこがれ、都を河南の洛陽にうつし、姓の拓拔を「元」と改め、公用語を漢語と定め、儒教国家の帝王たることを目指しました。しかし仏教に対しても好意的で、四九七年には、クマーラジーヴァを追慕するため三重の塔を建てさせています。政治に熱心な英主で、国力も充実し、南朝の齊にとっては脅威的な国となりました。しかし四九九年、三十三歳で亡くなり、宣武帝元恪（げん・かく 四八三―五一五）が十七歳であとを嗣ぎます。学問好きで仏教にも造詣が深かったといわれます。この北朝皇帝が即位した三年後の五〇二年に、蕭衍が南朝梁の皇帝となったのでした。魏の宣武帝は即位するとすぐ父母のために洛南の伊闕山に石窟を二か所ひらき仏像を刻ませます。完成は二十四年あとで帝の死後ですが、これが有名な龍門の石窟です。

梁の武帝も、即位したときにはすでに仏教の信者だったかと思いますが、その施策を見ると儒教的な色彩が濃厚です。五〇二年の四月に即位すると、八月には律令を刪定させます。五〇五年一月には五經博士各一人を置き、州郡に学校を立て、六月には孔子廟を立てます。五〇八年一月には百官九品十八班の制を定め、二月には將軍十品二十四班を定めます。五〇九年五月には儒教の經典に通じた者はその出身の家柄にかかわらず官吏にとりたてます。五一〇年三月には、帝は國子学、すなわち国立大学、の講義の席に親臨し、皇太子及び王侯の子らを入学させます。そして五二二年十一月には五礼を修定した、といったことに、儒教君主ぶりが察せられましょう。